

[ 実践報告 ]

## 精神看護学におけるグループワークの学習効果に関する検討

— 研究的思考と研究のスキルの基礎的育成にむけての試み —

前田由紀子<sup>1\*</sup>、増田安代<sup>1</sup>

**【要旨】**平成17年度の精神看護学の授業のなかで、K大学の看護学科2年生129名を対象に「ライフサイクルと危機的状況」というテーマで、平成17年4月から6月にかけて問題解決型のグループワークを実施した。本研究の目的は、グループワーク学習のプロセスを通して研究的思考と研究のスキルの基礎的育成における学習効果と課題を明らかにすることである。グループによる研究計画書の作成、研究レポートの作成、ポートフォリオによる情報収集、学会形式の発表という学習プロセス・研究レポートの内容・学習内容と学習効果についてのアンケート調査から検討した結果以下のことが明らかになった。学習効果として、グループワークを通して課題解決型の研究レポートの作成は、問題の背景・要因分析は浅い傾向にあったが、緒言・研究方法・結果・考察・結論・文献活用と一連の論文形式としてまとめることにより研究的な思考の理解を図ることができる。学会形式の発表会及び来賓の招待は、専門職への動機づけや自己研鑽、ポートフォリオの作成は、研究歴を残すことで自己肯定感を高め、情報収集や文献整理ができ、自己評価や研究の基礎となるスキル形成に繋がる。今後の課題として、研究的思考の育成を1年次より系統的に教授される必要性、そして思考の深まりや課外による学生の負担を軽減するためにゆとりあるカリキュラムの構築が必要であるということがあげられた。

**キーワード：**問題解決型グループワーク、研究レポート、学会形式の発表会、ポートフォリオ

### 【緒言】

看護職の育成に必要なことは、「与えられた仕事ができる」のではなく、「自分で何をすべきか目標を立て実践できる」ことである。また実践することにより分かった新たな知見は研究成果という形で残し、知識を共有化することも重要なことである。看護大学の教育においても研究的思考を兼ね備えることを目標に講義、演習、グループワーク、ロールプレイ等さまざまな手法が創意工夫されている。その中でもグループワークは、学生の主体的な学びが期待できる方法としてその効果が報告されている<sup>1) - 4)</sup>。

最近の学生の特徴として、核家族や少子社会を背景に育ち、協調性・協同性の不足、問題意識の低さ、主体性の乏しさが目立つ。自分の考えや思いを相手に伝える、逆に相手の考えや思いを聴くこと、加えて他者との関係の取り方も苦手として

いる。どれも看護職として必要なことであるが、このような学生が苦手とする能力・態度を育成する方法としてグループワークは効果的な学習といえる。

K大学看護学科の精神看護学の授業において、2年生を対象に例年、問題解決型のグループワークを取り入れ、授業の中で発表の機会を設けてきた。チーム意識の育成やグループの協同性や主体性を高めること、また研究的思考を育成するという目標のもとに授業展開を行ってきた。グループワークの発表会は対象学生と教員で行い、発表方法は資料やOHP・模造紙等を使用し、発表も一部のグループに限るか、全グループを実施する場合は講義内容の進路状況に合わせて分割して発表させてきた。テーマに関する資料、グループワークを通じての研究レポートや提出記録などは、ファイルへの保管を提示してきたが、ファイルの整理や活用状況の把握は不十分な状況であった。チー

<sup>1</sup>九州看護福祉大学 看護福祉学部看護学科、\*連絡先

ム意識の育成やグループの協同性や主体性を高めることについてグループワークでの成果を得てきたが、研究的思考や研究のスキルの育成は不十分な状況であった。そこで、今回のグループワークでは、研究的思考を深め研究のスキルの育成を強化するという目標の基に授業展開を試みた。そのための新たな取り組みとして、学会形式の発表会とポートフォリオを導入した。

学会形式の発表会では、全グループが発表を行い、運営は学生主体を基本とした。鈴木<sup>5)</sup>は、ポートフォリオとは、バラバラになった情報を一元化するもので、研究プロセスの一元化、成果の凝縮・再構築、学習の軌跡確認を行うための方法として適しているとし、学校教育や医学界での活用を勧めている。本研究では研究のスキルの習得が期待できると考え導入した。また、鈴木<sup>6)</sup>はポートフォリオの活用によるプレゼンテーションの効果について、「知識や技術を習得 (IN) するばかりでなく、身につけたものを生かし表現 (OUT) する場合、〈プレゼンテーション〉を設けることは極めて有効だ」とし、プロジェクト思考を含めたポートフォリオ活用を提唱している。アンケート結果からプレゼンテーションを行うことにより自信が得られ、学生の学びの意欲が向上するという結果が得られたので考察に加え報告する。

本研究の目的は、平成 17 年度の精神看護学の授業における問題解決型グループワークの取り組みのプロセスをとおして、基礎的な研究思考と研究のスキルの習得状況と今後の課題を明らかにすることである。

(用語の定義)

- ・問題解決型グループワーク：小グループで編成されたグループダイナミックスを活かし、課題解決に取り組むグループ学習。
- ・研究的思考と研究のスキル：テーマの焦点化、問題の要因分析、研究レポート作成までの論理的思考と、文献収集や整理、研究発表の準備と発表に必要な技術の習得。

## 【方法】

### 1. 対象

平成 17 年度に精神看護学を履修した K 看護大学 2 年生 129 名を対象とした。

### 2. 期間

平成 17 年 4 月 19 日から平成 17 年 6 月 25 日に実施した。

### 3. 方法

1) グループワークの展開に関するもの

(1) グループワークの実施と教員の関わり

グループワークの展開の概要を表 1 に示す。今回のグループワークはオリエンテーションと発表会は授業時間内に行ったが、グループワークの活動自体は課外の時間を活用したものである。

1 回目の授業に際して、「ライフサイクルでの危機的状況 ―家族とその支援に焦点をあてて―」というグループワークのテーマを提示した。グループワークの全体テーマ、目的、目標、各発達段階のテーマの例（乳幼児期であれば児童虐待による危機、学童期であればいじめ・不登校など）、発表までのタイムスケジュールと運営、評価方法（グループワークの参加状況、研究レポート、ポートフォリオ、発表会）の説明を行った。

グループ編成は教員が任意で行った。知らないもの同士でもチーム意識の形成や凝集性を高め、自己の考えが言える、また他人の考えが聴けるようになることを目的とし、1 グループ 8～9 人で 16 グループに編成した。リーダー・サブリーダー、発表を担当する各時期の選定とテーマはグループメンバーで話し合い、決定した。

第 2 回目の授業「ライフサイクルと心の健康」の講義後に、研究レポートについて説明を行った。研究レポートは、①事例・インタビュー・アンケートのいずれかの方法で実施、②問題の背景や要因の分析について文献で検討されている、③書式は論文形式（緒言、研究方法、結果、考察、結論、文献）に沿ってまとめる、以上で構成されグループで作成し最終的に提出するものとした。評価においても上記の 3 点を基軸におき、倫理的配慮についても説明を行った。グループワークの計画書を 1 週間後に提出させ、その内容はテーマ、テー

マ設定の理由、方法（対象、データの収集方法、何に焦点をあて分析していくのか）、グループワークのタイムスケジュールである。

研究計画を提出させた後にグループワークの実際に入った。課外時間を活用したので学生の授業時間に合わせ使用できる教室の場所の確保を行った。週2日2コマ（1コマ90分）の時間をグループワークのために使用できる教室とした。2名の教師で巡回し、グループワークに関連する内容について相談に応じ、適宜指導を行った。またグ

ループワークの参加状況を把握するため出席票を作成した。出席票には、グループワークに費やした時間、参加メンバー、グループワークの内容、質問事項の記入を実施毎に提出させグループワークの状況を把握するように努めた。

## (2) 発表会

### ①プレゼンテーションにむけての準備

発表会は学会形式で行うことを説明し、準備から後片付けまで役割を学生全員が分担し、主体的に取り組むよう指導した。発表についてはプレゼ

表1. グループワークの展開

科目名	精神看護学		
テーマ	ライフサイクルでの危機的状況 ―家族とその支援に焦点をあてて―		
目的	1) ライフステージにおける精神の危機を理解し、適切な対応や家族と地域における支援を考えることができる 2) 家族の機能が精神の健康に与える影響について理解し、それらに対する適切な支援策を考えることができる 3) グループワークを通して、主体的な学習姿勢や自己学習能力を養うとともにグループの成長過程をととしてメンバーとの関わりの尊さや難しさを学習する		
目標	1) 人間の成長発達やライフサイクルに伴う危機を理解し、それらがメンタルヘルスに及ぼす影響を考える 2) ライフステージにおける家族のありようや、危機的状況を身内にもつ家族がおかれている状況について理解し、必要な支援を行うことの重要性について理解する 3) グループメンバー1人ひとりが自主的に参加し、問題をグループで共有して考え、自分の意見を述べるができる		
展開	月日	教員	学生
	4/19	オリエンテーション：グループワークの全体テーマ、目的、目標、各発達段階のテーマの例、発表までのタイムスケジュールと運営、評価方法の説明を実施する グループ編成：1グループ8～9人を16グループに編成する	リーダー・サブリーダーを決定する
	4/26	研究レポートの説明：書式、内容、研究方法の説明を行う	課外で各発達段階の課題テーマを設定し、研究計画書を作成する
	4/27～	グループワークの環境（場所と時間）設定を行なう 教員2名でグループワークの場所に出向き関わりを持ち、介入を行う	
	5/9		研究計画書提出する
	5/10	研究計画書をチェックし、学生に返却する	グループワークの実際
	5/31	プレゼンテーションの実際について説明する 発表までのタイムスケジュールを再確認する	
	6/10		各グループは研究レポートを提出、発表方法と発表に関する役割分担を教員に報告する
	6/14	各グループの研究レポートをチェックし、学生に返却する	返却された研究レポートを修正する
	6/17		修正された研究レポートと発表時に必要な資料の印刷をする
	6/21	各グループの研究レポートと資料を配布する 発表までに読み、質問・意見をまとめておくよう指示する	
	6/24	会場設営、司会・進行・講評者うち合わせ、視聴覚機材テスト、リハーサルを行う	会場設営、司会・進行・講評者うち合わせ、視聴覚機材テスト、リハーサルを行う
	6/25	グループワーク発表会	グループワーク発表会
	7/5		ポートフォリオ、アンケートを提出する
備考	*グループワークのための環境の設定（場所と時間） 4/27～6/25 週2日2コマ（1コマ90分）の時間と場所の確保（学生の授業時間に合わせ使用できる教室を設定） *毎回グループワーク毎に出席票（グループワークに費やした時間、参加メンバー、内容、質問事項を記入）を提出させ、問題状況の把握に努めた		

ンテーションとは何か、プレゼンテーションの目的、発表のストーリー作り、発表スライドの組み立て、スライドの作り方、図表の作り方、発表原稿の作り方、発表の練習方法、質疑応答の仕方、発表者・聴衆者のマナーなど具体的に指導を行った。講評の視点についても説明を行った。発表方法や資料作成などグループの研究内容の特徴がでるように留意した。発表会の準備では、表題・プログラム・講評用紙・来賓用の資料等の作成を行った。前日に会場設営を行い、総合司会、司会、タイムキーパー、発表者、講評者、進行係、受付係、来賓の接待係の仕事内容の打ち合わせと発表のリハーサルを実施した。

## ②発表会当日

日本看護協会の学会発表に準じて実施した。病院関係者6名、地域住民から6名招待し、第三者評価の場も設けた。

1 グループの発表時間は5分間とし、第1群から第4群まで類似のテーマ毎に分類した。会場には講評席を設け、各グループから講評者を選出した。講評者は各群の発表が終了する度に講評を行った。個々の学生にも講評用紙を渡し各グループの発表に対し講評を行った。講評の内容は、「テーマと内容が一致しているか」、「テーマに対して見解が述べられているか」、「発表時間は守られているか」、「発表中、きちんとした態度を示しているか」、「発表者としての身だしなみは適切か」、「発表がわかりやすいように工夫されているか」の6項目で、3段階で評価し、最後に総評を記述するという形式をとった。発表終了後、来賓から総評を実施した。

## 2) 調査方法

### (1) 対象

平成17年度に精神看護学を履修したK看護大学2年生129名を対象とした。

### (2) 調査期間と方法

平成17年6月25日から7月5日まで、アンケート調査(留め置き法)にて行った。

### (3) 調査項目

①発達段階の特徴と危機への理解について2項目。評価は「理解できた」「まあ理解できた」「あまり理解できなかった」の3段階とした。②グループ

ワークを通しての学習効果について12項目。評価は「できた」「まあできた」「あまりできなかった」の3段階とした。内容は、主体性について目的意識をもって自発的に学習に取り組む態度とし、積極性(話し合いや作業に積極的に関わることができた)、責任感(役割に対して責任感をもって取り組んだ)、説明力(自分の意見をわかりやすく説明できた)、忍耐力(グループ内でいやなことがあっても頑張ることができた)の4項目、達成志向は目的達成に向けて互いを受け入れ成し遂げようとする態度とし、計画性(発表まで計画的に進めることができた)、協調性(グループはまとまりがあり協力的だった)、共感性(自分の考えと異なる意見に対しても柔軟な態度が持てた)、傾聴(メンバーの考えを聴くことができた)の4項目、探究心は学習の向上にむけ努力する態度とし、意欲(グループワークは意欲的に取り組めた)、向上心(研究的な考え方が少し理解でき、今後自分の興味のあるテーマに取り組んでいきたい)の2項目、満足感(目的を成し遂げた感情)とし、充実感(グループワークは充実していた)、達成感(グループワークは達成感があった)の2項目とした。③自由記述は学会形式の発表会、来賓招待、ポートフォリオに関するものである。

## 3) ポートフォリオ

ポートフォリオ作成の目的は研究プロセスの一元化と学習の軌跡確認であると説明を行った。A4ファイルを各自で準備させ、グループワーク開始時から文献等の資料やグループで討議内容、グループでの提出する研究レポート、発表原稿などをファイル化させた。グループワークであったが、個人の見解も入れるよう、個性やセンスが伝わるオリジナルのものを作成するよう指導を行った。凝縮ポートフォリオの説明は行ったが時間の関係上作成は指示せず、元ポートフォリオのみ発表終了後に回収することを説明した。

## 4. 学習効果の評価

研究レポート、学生の発表内容、ポートフォリオ、学生へのアンケート調査を評価方法として使用した。評価項目は学生に提示し、評価を行った。

1) 研究レポートと発表内容: 評価項目は、①指示された書式(緒言、研究方法、結果、考察、結

論、引用文献、参考文献)で整理されているか、②問題の背景・要因について文献や調査を通して分析できているか、③当事者と家族、地域への関わりに対し、看護者として必要な支援がグループの見解として述べられているかである。

2) ポートフォリオ：評価項目は、①文献等の資料が整理されているか、②討議内容や自己の見解の記述が含まれているか、③グループワークで提出された研究レポートと発表原稿が整理されているかである。さらにアンケート調査の記述内容から活用状況とその効果について検討を加えた。

3) アンケート調査：エクセルで単純集計し、比較・検討した。自由記述の分は、記述内容からそれぞれの設問の意義や学びに対する判読可能なキーワードになる主文をデータとして取り出し KJ 法を用いてカテゴリー化した。

## 5. 倫理的配慮

グループワーク開始時とアンケート調査依頼時に研究の趣旨を学生に口頭で説明し同意を得た。その際、グループワークの結果の提示と公表にあたってはグループまたは個人が特定されないよう配慮すること、アンケートについては、無記名とし、個人が特定されないことを保証した。アンケートは、自由参加であることを調査票配布時に説明した。

## 【結果】

### 1) グループワークの展開に関するもの

#### (1) グループワークの実施と教員の関わり

グループワークの展開に際して学生達は、指定された教室を利用するだけでなく、食堂や空き教室を利用していた。教員は学生が集まっている場所に出向き、テーマ設定に関することや、研究方法についての相談を受けた。グループワーク初期の段階では、学生が決めたテーマで何を明らかにしたいのか、方法をどうするのか研究計画書で確認しながら修正を行った。グループワーク実施毎に出席票の提出を義務づけたがその中の質問事項で共通の問題が確認された場合、授業で回答し問題解決に向け援助を行った。大学外へのアンケート、インタビューは、教員が事前に先方に依頼し、

調整を行った。学生はテーマに対して意欲的に取り組み、アンケートやインタビューなど地域に出て行こうとする傾向が強かった。フィールドを拡大するのではなく、小規模でも研究における調査の基礎的な理解が図れることを目的とし、できるだけ学内の資源を利用することを促した。また、グループでの協力を重視しメンバー間でのコンセンサスを得るような示唆を与えた。

グループワークが進んでいくと、グループ間の人間関係に関して、教師に相談することが多くなった。これに対しても教師はグループでの協力を重視しメンバー間でのコンセンサスを得るような示唆を与えるように努めた。プロセスレコードで自己洞察し、内省することを促した。その結果、自己が抱える問題や葛藤についてプロセスレコードをとおして、自己を振り返り、他者への協調や理解しようとする努力が見られ、主体的な解決に向けての認識の変化や行動の調整を図ろうとする態度をみることができた。

### (2) 発表会

#### ①プレゼンテーションにむけての準備

準備の初期は教師の指示を待つようなこともあったが、教師と一緒に行動しモチベーションが高まっていくと、発表会に向けて全員が役割分担し、主体的な行動をとることができた。

パワーポイント作成は1年次に習得しており動画を利用し凝ったものができあがっていた。5分の発表時間に対し、伝えたいことの工夫を重ねていた。研究レポート以外の資料作成についても自分たちが得た情報をできるだけ伝えたいと紙面を工夫していた。

#### ②発表会当日

当日の運営は学生が主体的に行なった。来賓として、学内の教員、実習病院の指導者、卒業生、地域一般住民の方々を招待し、地域の方との交流の場とすることができた。

学生間の評価を講評の状況でみると、講評を発表する態度は真面目であり、内容も適切でマナーも心得ていた。講評用紙の回収率は100% (129名)で、そのうち94.6% (122名)の学生はすべてのグループに対してではないが総評の記述をし、各グループの発表に対して評価をしていた。その一

例を抜粋し、次に紹介する。アルコール依存症の問題をテーマにした発表に対し、①アルコール依存症者を「否認」が問題であると捉えていることは良かった。テーマを「否認」にあてるともっと問題点が強調されて良かったのではないだろうか。

②研究方法が文献検討のみのためか情報の見方が偏り、断片的になっている。具体的な支援について検討する必要がある。③話すペースは早い部分もあったが、はっきりした口調で伝えたい態度が見受けられた。以上のように研究の内容や発表者

表2. 研究レポートの教員評価

発達段階	1. テーマ 2. 研究方法 3. 発表方法 4. 所定の形式	内容 (問題の背景と分析、関わりと支援に関するグループの見解) の評価
乳幼児期	1. 「乳幼児期の虐待が及ぼす子どもへの影響」 2. 事例検討 3. パワーポイント、資料 4. 所定の形式で作成されている。	虐待を受けた子どもの絵から、地域や血縁の結びつきが希薄になった社会で家庭が孤立化している現代の背景を分析している。社会資源の利用は検討しているが、家族の支援が検討できていない。
	1. 「事例からみる虐待の背景とその防止策」 2. 事例検討, アンケート調査 3. 資料 4. 結果と考察が整理されていない。	厚生労働省の事例、インターネットの事例、インタビューから虐待の背景を多面的に捉えている。心理的背景として虐待連鎖の問題まで触れているが、家族の支援が検討できていない。地域の支援が不十分である。
	1. 「育児放棄が乳幼児の成長にどのように影響するか」 2. 事例検討 3. 資料 4. 所定の形式で作成されている。	育児放棄の背景に母子関係の形成不全を挙げ、父親の育児不参加・母親の相談相手の不在など家庭の問題を分析している。家庭訪問など保健師の支援を検討できているが他の社会資源の利用が検討されていない。
学童期	1. 「学童期における虐待」 2. 事例検討、インタビュー 3. パワーポイント、資料 4. 参考文献・引用文献の記載がない。	児童相談所に訪問インタビューし、家庭という狭い範囲だけでなく地域との関わりの重要性を分析できている。地域住民の協力・理解を得、地域を主体とした養育環境を形成するなど子育て支援が検討できている。
	1. 「いじめと不登校の問題について」 2. 文献検討 3. パワーポイント、資料 4. 研究方法の内容が不十分である。	不登校の問題を本人の特徴、学校・家庭の対応の問題として捉えている。学童期の発達課題を考慮したアプローチ、家庭と学校の連携の重要性等本人への支援を考察しているが、家族の支援が考察できていない。
思春期	1. 「少年犯罪が低年齢化した背景」 2. 事例検討 3. パワーポイント、資料 4. 「緒言」に対し「結論」がない。	現代の子どもを取り巻く環境 (インターネットの情報、人間関係や受験のストレスなど) と思春期という多感な時期に関連づけ考察している。未熟な人格を育てるために必要な地域の支援に対する考察が不十分。
	1. 「少年犯罪の背景」 2. インタビュー 3. 資料 4. 所定の形式で作成されている。	大人の余裕のない社会が子どもに影響することや、マスコミの報道の問題を指摘し、学校・地域社会・家族の連携が事件の減少に繋がると分析している。子どもと家族の時間を作る地域の支援を考察できている。
	1. 「思春期における摂食障害について - 摂食障害に隠された心理・援助法-」 2. アンケート調査、インタビュー 3. パワーポイント、資料 4. 参考文献・引用文献の記載がない。	家族背景や社会背景、思春期の葛藤も関係している。本人の問題だけでなく、家族にも問題があり家族も自分自身を振り返る必要があると分析している。現実的な支援の方策は検討できていない。
青年期	1. 「ニートの現状 - 頑張れないニート-」 2. 文献検討、アンケート調査 3. 資料 4. アンケートの結果が資料の欄になっている。	ニートになる社会的背景のほかに発達段階の障害が大きく関係し人格形成に影響すると分析している。インターネットでニートにアンケートをとり現実的に追求しているが、その支援について考察されていない。
	1. 「フリーターについて」 2. インタビュー 3. パワーポイント、資料 4. 「緒言」に対し「結論」がない。	フリーターの増加は本人の責任のみでなく、社会や地域にも原因がある。企業の雇用対策の他に個人を尊重して家族や地域で支援していくことも大切と考察しているが、現実的な支援の方策は検討できていない。
成人前期	1. 「キッチンドリンク」 2. アンケート調査 3. 資料 4. 所定の形式で作成されている。	核家族化での家族の役割分担と個人の発達課題からキッチンドリンクの背景を分析している。家族や周囲とのコミュニケーションが大切と気づいているが、具体的な支援策について考察されていない。
	1. 「医療従事者に及ぼす燃え尽き症候群の背景とその対策」 2. インタビュー 3. パワーポイント、資料 4. 所定の形式で作成されている。	看護職の仕事の厳しさや性格の真面目さ、気持ちの切り替えが下手であることが背景にあり、その対策として家族の支えや燃え尽きを防ぐシステム作りが必要と考察している。支援策が具体的に考えられていない。
成人後期	1. 「アルコール依存症者の対人関係」 2. アンケート調査 3. パワーポイント、資料 4. 所定の形式で作成されている。	アルコール依存症者は「否認の病」であるため治療が遅れ、対人関係のトラブルが発生する、また理解不足からの偏見が背景にあると分析。支援策として家族・職場・地域での対応方法を具体的に検討できている。
	1. 「うつ病の内的要因と外的要因」 2. 事例検討 アンケート調査 3. パワーポイント、資料 4. 「結果」と「考察」が整理されていない。	自分たちの親世代を対象に職場での役割や更年期症状からうつになる背景を分析している。疾患に対する理解と家族や周囲のサポートがうつ病を重症化させないと考察するが支援策について検討が不十分である。
老年期	1. 「家族による高齢者虐待の背景とその防止策」 2. 事例検討 3. 資料 4. 研究方法の内容が分からない。「結論」の記載がない。	過去の間人間関係不和の延長線上や介護ストレス、認知症などが背景にあると分析している。社会資源の利用や介護者本人の悩みを相談できる窓口創設など介護負担を軽減するための具体的な支援策が検討されている。
	1. 「うつ状態と自殺」 2. 事例検討 3. 資料 4. 所定の形式で作成されている。	典型的な事例から老年期のうつの背景を分析している。うつの一時的対応を理解し家族の支援、地域の支援を考察しており、地域のサポートシステム作りの必要性を指摘しているが老年期の特性が考慮されていない。

の態度まで講評できていた。

来賓者の反応は、発表会に地域住民が参加することについては好意的で、次のような意見があった。学生の取り組みに対して改めて考えさせられた問題が多く、次回も参加したい、社会人として学生に伝えたいことがある、学生の発表資料は事前に用意してほしい、などが聞かれた。学会形式の発表会について、将来看護職に就く上で効果的であるという意見が占め、その理由として看護職への専門的意識が高くなる、知識の向上に繋がる、対人関係を考える上でぜひ必要と思うなどであった。

### ③研究レポートと発表内容

所定の形式でまとめることは、ほとんどのグループができていた。問題の背景と要因への分析については、文献や事例検討、アンケート、インタビューなどから分析しているが、グループの見解は浅い傾向にあった。表2に各グループについてまとめを示した。

## 2) アンケート調査の結果

アンケートの回収率は96.9% (125名)、有効回答率は96.9% (125名)であった。

### ①ライフサイクルの理解について

発達段階の特徴と危機への理解ができたかについては、「理解できた」54.4% (68人)、「まあ理解できた」44.0% (55人)、「あまり理解できない」1.6% (2人)であった。危機を乗り越えるための具体的な方法が理解できたかについては「理解できた」38.4% (48人)、「まあ理解できた」57.6% (72人)、「あまり理解できない」4.0% (5

人)であった。

### ②グループワークを通しての学習効果について

アンケート集計表を表3に示す。「主体性」に関する積極性・責任感・説明力・忍耐力の4項目のうち責任感と忍耐力の2項目で70%以上が「できた」と答え、説明力は30%弱であった。「達成志向」に関する計画性・協調性・共感性・傾聴の4項目のうち、共感性と傾聴の2項目で70%以上が「できた」と答えていた。「探究心」に関する意欲と向上心の2項目、「満足感」に関する充実感と達成感の2項目とも60%が「できた」と答えていた。

### ③自由記述の分析結果について

学会形式の発表会についての自由記述では、4つのカテゴリーが抽出された。プレゼンテーションの実際 (43件)、発表での自信 (79件)、学習に対する意欲 (27件)、将来への展望 (12件) に分類され、表4. 発表会の自由記述の学会形式の発表会の項目に示した。

発表会に来賓を招待することについての自由記述は、3つのカテゴリーが抽出され発表態度への効果 (53件)、思考面の広がり (67件)、情意面への効果 (35件) に分類され、表4. 発表会の自由記述の来賓者についての項目に示した。

アンケートにおけるポートフォリオに関する自由記述から2つのカテゴリーとして自己評価 (68件)、自己研鑽 (104件) に分類され表5に示した。

## 3) ポートフォリオ

元ポートフォリオを再構築し凝縮ポートフォリ

表3. グループワークの学習効果

	質問項目	できた % (人)	まあできた % (人)	あまりできない % (人)
主体性	積極性 (話し合いや作業に積極的に関わることができた)	53.6 (67)	36.8 (46)	9.6 (12)
	責任感 (役割に対して責任感をもって取り組んだ)	73.6 (92)	23.2 (29)	3.2 (4)
	説明力 (自分の意見をわかりやすく説明できた)	28.0 (35)	59.2 (74)	12.8 (16)
	忍耐力 (グループ内でいやなことがあっても頑張ることができた)	78.4 (98)	20.8 (26)	0.8 (1)
達成志向	計画性 (発表まで計画的に進めることができた)	43.2 (54)	48.8 (61)	8.0 (10)
	協調性 (グループはまとまりがあり協力的だった)	58.9 (73)	29.8 (37)	11.3 (14)
	共感性 (自分の考えと異なる意見に対しても柔軟な態度が持てた)	76.8 (96)	21.6 (27)	1.6 (2)
	傾聴 (メンバーの考えを聴くことができた)	71.2 (89)	26.4 (33)	2.4 (3)
探究心	意欲 (グループワークは意欲的に取り組めた)	57.6 (72)	37.6 (47)	4.8 (6)
	向上心 (研究的な考え方が少し理解でき、今後自分の興味のあるテーマに取り組んでいきたい)	58.4 (73)	38.4 (48)	3.2 (4)
満足感	充実感 (グループワークは充実していた)	59.7 (74)	31.5 (39)	8.9 (11)
	達成感 (グループワークは達成感があった)	59.7 (74)	34.7 (43)	5.6 (7)

表4. 発表会についての自由記述

	カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容 (一部紹介)
学会形式についての自由記述	プレゼンテーションの実際 (43件)	パワーポイントの効果 (9件)	学習が深められメリハリがあり興味が持てた。パワーポイントを使っていた班は見やすくよかった。パワーポイントを使った発表に慣れていく必要があるのでよかった。等
		発表時間 (19件)	5分でいかにわかりやすく発表するか学べたのでよかった。もっと自分たちの成果をみてほしい。5分でわかりやすく印象が残るようにすることが難しかった。等
		発表の工夫 (15件)	どうしたら相手に見やすくわかりやすく発表できるか考え、自然に力が入った。初めてで声の大きさ、発音もうまくできておらず発表のことをもっと考えているべきだった。等
	発表での自信 (79件)	学生主体でのやりがい (13件)	司会、進行、会場作りなど皆でひとつのものを作り上げることができた。学生全員が何らかの役を持ち、発表会を作り上げているという雰囲気があり充実していた。等
		新しい経験 (25件)	学会形式は発表に意識が高まりよかった。初めての試みで不安、戸惑いがあったがよい経験になった。普段とは違うかたちで気が引き締まり新鮮。新鮮な気持ちで参加できた。等
		心地良い緊張感 (32件)	準備しているときから緊張が楽しみに変わった。緊張感があり学習がより深まった。社会に出て役にたつような空気でもよかった。学会の雰囲気や緊張感のなかで発表できた。等
		達成感 (9件)	戸惑う部分が多かったが発表までの過程で得られたものは大変大きなものだった。学会形式でやったからこそ達成感が増した。グループで考えたことをみんなに聞いてもらえた。等
	学習に対する意欲 (27件)	他グループの発表への興味 (16件)	他の班の発表に興味を持って聞いた。知らないことが多かったので勉強になった。各班で足りないところを補足でき、深く理解できた。他の班の発表を聞きさまざまな発見があった。等
		講評での気づき (11件)	講評がいて自分の視点以外で気づくことができた。講評により何が足りなかったか理解できた。質疑応答、講評で他の人の意見を聞き知識・考え方を増やすことができた。等
	将来への展望 (12件)	将来役にたつ (10件)	将来研究発表する機会もあると思うのでこういう雰囲気を知っておくのもよい。看護師になって発表の機会があると思うので非常に役立つと思った。自覚もでき、発表形式は役立つ。等
研究の理解 (2件)		研究の大切さが理解できた。少し研究の仕方が理解できるようになった。等	
来賓招待についての自由記述	カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容 (一部紹介)
		発表態度への効果 (53件)	緊張感 (45件)
		努力 (8件)	来賓に如何に理解しやすく見やすく自分たちの成果を見ていただくかという点に気をつけた。第三者にわかるように説明しなければならず、工夫を凝らす必要がありよかった。等
	思考面の広がりへの効果 (67件)	見解の広がり (51件)	してきたことを先生以外の方に評価してもらうことはあまりないのでよかった。いろんな立場から意見が聞けてよかった。地域の方の声が聞けるといろんなことを考えさせられる。等
		専門的視点 (16件)	臨床の現状も話していただき、実習に行くとき役立ちそう。現場の先輩の声を聞いたことがよかった。専門的な意見も聞けてさらに学ぶことができた。専門家の視点がうれしい。等
	情意面への効果 (35件)	自信 (18件)	地域の方に自分達の発表を肯定してもらい、自信がついた。総評、応援の言葉をもらい発表の活かし方が考えられるようになった。来賓がこられた発表会を終えて自信がついた。等
		意欲 (7件)	これからどのようにやっていけばよいか確認でき看護師になるという気持ちが改めてわいた。自分たちの研究発表を聞くために来られてうれしかった。やりがいがあった。等
感謝 (10件)		2年生という学年で地域の方の意見を聞き交流 (接点) をもてたことは貴重なこと。時間を作って聞いていただき感謝する。地域の方々に本大学に対する意見も聞けてとても感激した。等	

オを作成する説明<sup>5)</sup>は行ったが、時間の関係上凝縮ポートフォリオは作成せず、元ポートフォリオを評価の対象とした。

129冊のポートフォリオを回収した結果、全く資料がないものは9冊あった。研究資料は、インターネット94件、文献65件、新聞切り抜き13

件の順で、インターネットの情報が多く文献活用が少ない状況にあった。グループワークの討議内容やグループワークの各過程における自己の見解の記述は50件あり、グループによって差が見られた。最終的な自己の見解については全員が記述していた。



表5. ポートフォリオを振り返っての自由記述

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容 (一部紹介)
自己評価 (68 件)	自己肯定感 (26 件)	すべてまとめたので自分のしてきたこと、考えたことがわかる。振り返ることで頑張った自分を思い起こす。ファイルにしてみると少しずつでも自分のものにできた自信がいった。等
	情報収集への満足感 (34 件)	本、教科書、インターネットさまざまなものを使って調べることができた。今までのレポートと違い自分が収集した資料やGW計画書が入り、参考になる。資料集めを頑張った。等
	達成感 (8 件)	グループで作上げたのを見て大きな達成感を感じた。どこまでやれいいのか終わりが見えない感じがしたが達成感がある。資料を集め検討し、議論を重ねたので満足した。等
自己研鑽 (104 件)	学習への意欲 (12 件)	もっと深く学習したい。日々の足跡を残せる学習をしていきたい。他の発達段階についても学びたい。夏休みを利用して調べたいと思う。等
	研究方法の反省 (72 件)	もっと時間をかけて読み込んだり調べたりするべきだった。資料から読み取るだけでなく、自分で考え発展させ研究を進めていく力を養っていきたい。情報収集をきちんと行う。インターネットの情報収集が主だったので、さまざまな角度からするべきだった。等
	課題 (20 件)	自分の意見がもっと述べられるよう自分の考えをまとめることが大事。理解はしたが文章にしたり人にわかりやすく伝えることが課題。自分の意見を言う。自分の意見を持つ。等

### 【 考 察 】

今回、スタートから発表、研究レポートの提出まで約2カ月を要した。アンケート調査、研究レポート、学生の発表内容、ポートフォリオから検討したことを述べる。

まず、グループワークの目的・目標の達成状況について述べる。提出された研究レポートからみると所定の形式でまとめることはできていたが、問題の背景と要因への分析については、文献や事例検討、アンケート、インタビューなどから分析しているが、浅い傾向にあった。例年、2年生の前期に問題解決型のグループワークを実施し、論文形式でレポート作成をさせているが、論文形式でのレポート提出が苦手な学生は多い。文献検索の方法が分からない学生も多い。種々の文献や書籍の紹介を行ったが、研究資料として収集したものがインターネットからの情報が多く、安易な検索に留まる傾向にある。思考の深まりは急速に育つものではないので、1年次から研究の基盤となるような思考を育てていく授業展開の必要性を痛感している。

アンケートではライフサイクルにおける発達段階の特徴、危機に対する理解は、98%の学生が理解できたとし、危機を乗り越えるための具体的な方法の理解についても96%の学生が理解できたとしている。学生は、課題テーマの研究レポートを作成していく過程で、正常な発達をふまえ問題の背景や要因についてグループワークを通して

自からが考えなくてはいけない状況にたたされたこと、インタビューやアンケートを通して現状がみえてきたこと、分析の具体的方法や要因をふまえた上で支援を検討しなくてはいけないということをもつて学んだこと等からこのような結果になったものと考えられる。

しかし、研究レポートに記述されたグループの見解は、当事者を軸におき家族へと広がりをもたせ、家族の抱える問題や支援へと広がりをもたせた考察をさせたいと考えていたが、深めることがあまりできていなかった。家族や地域の支援の必要性は出ていたが、その方向性と具体的支援は検討できていないグループが多かった。

これは、精神看護学の授業が2年の前期に集中しており、授業の進行上グループワークを課外の時間にしかとれないことから家族や地域まで充分検討する時間がなかったことや、カリキュラムの関係から家族や地域を支援する視点が育っていない中でのテーマ設定であったことなどに起因することが考えられる。課外の時間を使うことによる負担や他領域の課題が重なることの負担など学生に無理が生じたのも事実である。家族看護学や地域看護学と授業が並列で行われるようなカリキュラムを構成したり、他領域との連携を密にし、学生の負担を軽くするなど工夫することにより、分析の深まりや家族・地域からの視点が広がり学習効果が上がるのではないかと予想される。なお、課外にグループワークを行う場所の設定を行い教員が関わるようにしたが、教員の関わりについて、

「もっと関わって指導してほしい」「研究の方法が分からなかった」という意見と、反面、「ほどよい関わりで学生の主体性が保たれた」という意見があった。グループとして成長していく上では、葛藤や対立に対する調整、環境のセッティングも教員の大きな役割と考え関わったが、教員が任意で構成したグループでありグループ間の格差が生じたと考える。プロセスレコードを活用するなどグループが何を援助してほしいのか把握し、教員が直接援助するのではなく、グループ間での成長が望めるような関わりの必要性を感じた。

次に発表会について検討する。今回は学会形式で行ったがプレゼンテーションの実際を行うことにより発表の効果を上げるための真剣な取り組みがみられた。パワーポイントの効果や制限された発表時間で如何に相手に理解してもらうかなど工夫を重ねていた。司会、進行、会場づくりと皆でひとつのものを作り上げていくことで、一体感や充実感、自信、また各自で講評し更にグループ間で講評を行う、これらの刺激を通して、看護の専門職となる動機づけにも繋がっていったことが考えられる。学生と教員だけの発表会では、緊張感が保てなくなる可能性がある。今回、来賓を招待したことで良い緊張感が生まれ、発表への工夫と責任感が生まれた。地域の方に自分たちの発表を評価してもらうことや違う視点からの意見を聞くことで、学生に感動や自信、思考の広がりが見られたり、地域との接点を持てたことに対して感謝する姿勢がみられた。また、臨床の意見を聞くことで専門的な視点の広がりにつながっていた。来賓にとっても学生の発表は刺激になっており、次回も参加したいという意見が聞かれ、K大学の学生に興味を持てたのではないかと考える。このような地域と大学のつながりを通して、より学生の主体的な自己学習力を強化していけるのではないかと考えている。

鈴木<sup>6)</sup>は「自分が実際にした仕事や経験から得た『価値ある知』を再構築し、オーディエンス(後輩や同僚、指導者)の前でプレゼンテーションすることで、ロジカルな表現力やわかりやすく自分の考えを伝える力などを身につけられる。」と述べているが、発表する側も評価する側もお互

いが刺激になり、深い学びに繋がっていたものと考えられる。発表会についての自由記述から、プレゼンテーションの実際について「5分でいかにわかりやすく発表するか、どうしたら相手に見やすくなるか」など、発表の工夫を凝らしている内容からプレゼンテーションの効果が確認できた。

最後にポートフォリオについて検討する。回収したポートフォリオは、資料の内容や量、グループワークの討議内容についてグループ格差がみられた。グループの格差は、グループの凝集性や協同性、積極性、責任感に起因するところと教員の途中経過の指導が不十分であったことが考えられる。アンケートの振り返りの自由記述から、「頑張った自分に自信がついた」、「グループでの達成感を感じた」など自己肯定感を高められる内容と、「研究歴を残すことでインターネットの情報に頼りすぎていたことがわかった」、「資料を読みとるだけで自己の考えを発展させることができなかった」など研究方法の反省がみられた。授業時間の関係上、凝縮ポートフォリオに完成させることはできなかったが、元ポートフォリオの作成だけでも自己評価、自己研鑽に繋がり、研究の基礎となる資料の整理と活用の方法が学べたのではないかと考える。

今回のグループワークの学習プロセスを通して、研究的思考とスキルの基礎的な育成をしていく上で有効ではないかということが示唆された。

**【結論】** 今回の問題解決型のグループワークの学習プロセスとアンケート調査を検討した結果以下のことが明らかになった。学習効果として、①グループワークを通して課題解決を図り、研究の基礎的な考えを取り入れた研究レポートの作成は、研究的な思考の理解を図ることができる。②学会形式の発表会及び来賓の招待は、専門職への動機づけや自己研鑽に繋がる。③ポートフォリオの作成は、自己評価や研究の基礎となる資料整理や活用の方法など研究のスキル形成に繋がる。

今後の課題として、①研究的思考の育成を1年次より系統的に教授される必要がある。②課外時間の活用は学生の負担になるため、他領域とのスケジュール調整やゆとりあるカリキュラムの構築が必要である。

## 【文献】

- 1) 宮崎美保子、深田美香、高橋弥生、内田宏美. 生活援助技術における学生主体の授業とその評価ーグループ学習を導入してー. *Quality Nursing*. 2002 ; 8 (9) : p. 53 - 59.
- 2) 上山和子. 小児看護学の教育方法に関する研究 (1) ー授業方法にグループワークを導入した効果と教育上の課題ー. *新見公立短期大学紀要*. 2002 ; 23 : p. 123 - 131.
- 3) 木村清美、橋本知子. グループワークの効果ー老年看護の一教授法における検討ー. *足利短期大学研究紀要*. 2001 ; 21 (1) : p. 41 - 49.
- 4) 石井知子、中村和代. グループワークを取り入れた基礎看護技術教育に関する検討ー成績差が少ないグループ編成を試みてー. *聖マリア学院短期大学紀要*. 2003 ; 18 (15) : p. 15 - 18.
- 5) 鈴木敏江. ポートフォリオでキャリアを生かす！ ー成長し続ける看護師になるためにー. *看護展望*. 2005 ; 30 (2) : p. 157 - 159.
- 6) 鈴木敏江. 未来教育〈知の共有プレゼンテーション〉 ー意欲ある看護師の育成ー. *看護展望*. 2005 ; 30 (2) : p. 160 - 164.

[Report]

## Study on Learning Effect of Group Works in Psychiatric Nursing

— toward fostering basic academic thinking and skills —

Yukiko Maeda \*, Yasuyo Masuda

*Kyushu University of Nursing Social Welfare, 888 Tomio, Tamana-shi,  
Kumamoto 865-0062, Japan*

### [Abstract]

In the FY 2005 psychiatric nursing course for the 129 sophomores at “K” University, problem-solving group works were employed from April through June 2005 under the theme of “Life Cycle and Crisis”. This study aimed to elucidate the learning effects and the challenges in fostering basic academic thinking and skills through the process of group works. Examination of their learning process (creating a group research plan, formulating a research report, data acquisition based on a portfolio, and public presentation in manner of academic conference), contents of research reports, and the results of questionnaire survey concerning the contents of learning and the learning effects shed light on the following effects and agenda in terms of incubating the academic thinking and skills. As for the learning effects, writing problem-solving research reports through group works facilitated students to understand the academic thinking by following the sequence of the academic paper format (introduction, research method, results, examination, conclusion, and reference), although their reports tended to show somewhat shallow factor/background analysis of the issue. In addition, public presentation in manner of academic conference with invited guests developed students’ motivation for professionals and self-culture. At the same time, filing a portfolio allowed students to raise their self-affirmation with the visible research archival record, and to file the acquired data, which helped them evaluate themselves and acquire basic academic skills. As for agenda, this study found the necessity of systematic teaching from the first year to foster academic thinking. It also highlighted the need of a curriculum with grater latitude, which eases the burden on students from extracurricular activities, to encourage deeper thinking.

**Key words :** problem-solving group work, academic report, public presentation in manner of academic conference, portfolio

---

\* Corresponding author. FAX: +81-968-75-1841, E-mil: yukiko@kyushu-ns.ac.jp